

「特攻隊員・上原良司」の誕生

——ある学徒兵を巡る資料とメディア表象——

都倉武之



▶ はじめに

慶應義塾大学経済学部出身の上原良司（1922-1945）が陸軍特別攻撃隊員としての死を前にして書き残した手記は、近代日本史上、軍人が書き残した遺稿中で、最もよく知られているものの一つとって良いであろう。彼の遺稿は、戦没者遺稿集として長く読み継がれている『きけわだつみのこえ』の本文の一編に収録されているだけでなく、すべての遺稿の総論的な位置づけのプロローグとしても採用され、一人で二編の遺稿を収録されるという別格の扱いを受けている。彼の遺稿は「自由主義者」を自称し、特攻を実行する自己を「自殺者」とであると相対化する眼差しを自ら言語化している。さらに権力主義、全体主義の国家は「必ずや最後には敗れる」とまで言及する内容の鋭敏さから、学徒兵を思想史的に分析する試みにおいてもしばしば引用され、論じられてきた⁽¹⁾。

その言説は、日本の戦争指導者や為政者に対する学徒兵の理性的批判の「代表例」として語られているともいえるし、特攻という運命に殉じた若者の手記中では特筆すべき「例外的な存在」とも目されているといえよう⁽²⁾。

思想史的な意味で言えば、佐々木八郎や林尹夫など、より精緻で学究的な言説は存在しているが⁽³⁾、良司の言説には強い自我を示す印象的な語彙が用いられており、素直に直感的に心情が吐露されたという印象を受ける⁽⁴⁾。換言すれば稚拙さを感じる向きもあるであろう。

また良司の遺稿には、恋心を抱いていた女性を想う言葉が含まれており、これに加えて、暗号めいたラブレターが別に残されていたことなども相まって注目度を増しているし、端正な顔立ちもそれを手伝っている。

さらに昭和20年4月、出撃を前に最後の帰郷を許された際、門前で家族と別れた後、駅に向かう途中にある橋の上でふるさとの山を振り返って「さようなら」と3回大声で叫んだという逸話は、望まずして郷里への思いを断ち切らねばならなかった多くの若者を代弁する象徴的な情景として語り継がれるようになった⁽⁵⁾。

すなわち、上原良司は単に後世に読み継がれる「言葉」を残しただけでなく、心寄せる女性の存在や、忘れがたい故郷の山や川という舞台装置など、人間性を浮かび上がらせる要素が一体となって強い個性を有する特攻隊員として認知され、博物館、映画、テレビ番組等多様なメディアで語られているのである。語弊を恐れずに言えば、絵になる特攻隊員なのである。

その一方において、良司を過度に特別視する風潮や、理性的な批判を残しながら結局特攻出撃命令に従っていった従順さや思想の不徹底を批判する見解もある⁽⁶⁾。

筆者は、平成20年以来長野県安曇野市の上原良司の実家をたびたび訪問する機会を得て、そこに残された膨大な遺品を慶應義塾出身者の戦時下の動向と思想を追う基礎資料として目録化する作業を慶應義塾福沢研究センターのプロジェクトとして進めている。その調査は上原良司個人だけではなく、やはり慶應義塾に学んだ2人の兄良春と龍男、さらにはその他の家族や親族も範疇にし、この家を取り巻く歴史や環境が現在どのように残されているかをまず明らかにした上で、そのありのままの上原家の姿を改めて世に問うことを目的としている⁽⁷⁾。保阪正康は「学徒兵たちののこされた遺稿は、それ自体で読むではない」と指摘し「時代との関連性を抜きにして独立した文章として読む」べきではないとしているが⁽⁸⁾、良司とその周辺は、奇跡的にも詳細に戦前・戦中の日常を復元できる膨大な資料が残存しており、彼を、かなりの精度をもってその時代と環境の中に戻して考えることができる。良司のテキストを戦争の時代の中に位置づけるためには、等身大の無名者としての一青年に立ち戻らせる必要があるのである。

本稿は、上原良司の言説を思想史的に検討しようとするものではない。彼の広く語られるイメージと、資料から浮かび上がる実像とが、ある部分で乖離あるいは一部分を誇張されていく過程を明らかにしようとするものである。その乖離は、良司の遺稿の意思がより明確になるようにという意図に基づく、意識的無意識的な介在者の営為によるものといえるが、それによって資料の取捨選択や部分省略などが行われて、結果的にイメージがより鋭敏に描き出される反面、実像と食い違っていった過程を跡づけようとするものである。具体的には、①「自由主義者」を公言する遺稿をより理性的に、そしてその成立を劇的に、②「恋人」への思いをより純粹で強いものに、そして③「故郷」への強い思いをより印象的な情景に、という方向性をもって良司に関する資料が整理され、これが他の特攻隊員と上原良司を差別化する欠かすことの出来ない3要素として、研ぎ澄まされていく過程を追っていくこととしたい。

▶ 1. 「自由主義者」上原良司の誕生

上原良司が世に知られるようになったのは、何よりもまず強烈な個性を発揮した「遺書」の存在によってである。そもそも良司はものを書く習慣の備わった青年であり遺稿と呼ばれるものが膨大に残されている⁽⁹⁾。「遺書」と呼ばれるものは、3種類存在する。それらは、執筆の順番に第1～3の遺書と呼ばれているが、伝来について正確に知られていない部分もあるので、改めて一つずつ説明しておきたい。

(1) 第1の遺書

上原良司が、愛読書の羽仁五郎『クロオチェ』の表裏の見返し（表紙を開いたところ）にペン書きした遺書である。「昭和拾八年九月廿二日夜九時」とあり、これは東条英機のラジオ演説により文科系学徒に対する徴兵猶予の停止が発表された日である。表紙の見返しには「父上様並びに母上様」と宛名があって完結している。それとは別に裏表紙見返しには、「大きい兄さん」（長男良春）、「龍兄さん」（次男龍男）、清子（上の妹）、登志江（下の妹）、「澄子姉さん」（良春の妻）、「尚子姉さん」（龍男の婚約者）、「青木さん」、「竹林さん」、「師岡さん」（家族ぐるみで付き合っていた遠縁の親族とその近隣の住人）が名前を挙げられた、もう一つの文章がある。ここでは紙幅の関係から掲載しないが、「日本の自由」のための戦死を「満足」と記し、親しい人々への別れの言葉を記している。

目黒区本郷町の下宿で執筆したと考えられ、後に長野県有明村の実家に持ち帰り、離れ

2 階の本箱の引き出しに隠された。

なおこの本の本文中には、片思いの女性（石川冷子）に宛てた秘密のメッセージが残されていることもよく知られている。本文のあちこちに○で囲まれた字があり、それをつなげて読むと次の文章が現れるという趣向のものである。

きようこちゃんさようなら僕はきみがすきだつたしかしそのときすでにきみはこんやくの人であつたわたしはくるしんだそしてきみのこうフクをかんがえたときあいのことばをささやくことをダンネンしたしかしわたしはいつもきみおあいしている⁽¹⁰⁾

この本の所在については、第2の遺書の末尾に「離れにある私の本箱の右の引出に遺本があります。開かなかつたら左の引出を開けて釘を抜いて出して下さい」と記載することによって、家族に場所が伝えられた。そして良司の特攻出撃後、両親の指示で妹の上原登志江が発見し、暗号も登志江が気付いたという⁽¹¹⁾。

(2) 第2の遺書

便箋3枚にペン書きされ、封筒に入れられた遺書。長野県有明村の実家に残されていた。封筒には「遺書／御両親様へ／良司ヨリ」とある。日付はなく、執筆時期については後述する。この遺書は、良司の出撃後に遺本（第1の遺書）に先立ち、家族が発見したと考えられる。出撃前に知覧から出された妹の上原清子宛の最後の葉書⁽¹²⁾に「遺書は入学記念アルバムの中にある」と記されており、また平成30年に上原家から発見された出撃2日前の日付の両親宛の手紙（第3の遺書と同じ日本映画社原稿用紙に記入されている。写真のみで実物は行方不明）にも「遺書は離れの入学記念アルバムの中にあります」と書かれていることから⁽¹³⁾、アルバムに挟んで残されていたと推定される。また、昭和18年の日記である「朝日日記」に挟み込まれたメモには「左ノ引出ニ遺書ガアリマス／右ニアル釘ヲヌイテカラ／引出シテ下サイ／良司」と記されている。恐らく出撃まで書信の機会がない可能性も考えてこのメモも残したのであろう。つまり第2の遺書の位置は3つの方法で伝えられ、これにより自宅離れの置床（物入れ）にあったアルバムから発見されたと考えられる。

(3) 第3の遺書

陸軍報道班員高木俊朗（後の戦記作家）の求めに応じて書いたとされる遺稿。社団法人日本映画社用原稿用紙7枚にペンで書き出し、途中から鉛筆に変わる。冒頭に特攻部隊名と階級、生年月日、本籍、現住所、出身校が記され、続いて「所感」と題して本文を記す。宛名は特に記されていない。日付はなく「出撃前夜」とあるが、これは昭和20年5月10日夜の執筆と考えられている。この遺稿は、終戦前に高木によって上原家に届けられたとされるが、その時期は明確ではない⁽¹⁴⁾。

高木の作品では、「隊員の誰彼となく、私の報道用のノートに、それぞれの経歴や、感想や、伝言を書きつけ」、それが「ひとまわりして、私の手に戻ってきた」中に記されていたことになっていたり⁽¹⁵⁾、受け取った時の会話や時間なども夕方だったり出撃直前だったり一定していない。従ってそれらのディテールについては、一つの記述をもって断定することはできないと考えられる。高木は多くの若者の最後の時間を見届けたことによって残された言葉を残された者に伝える使命感を負い、ディテールについては若干の脚色を加えながら精力的に残していったのである。

上原良司の遺書が世に知られた最初は『週刊朝日』（1949年1月23日号）に掲載された「第二はるかなる山河に」と題する見開きの記事である。この記事によれば、東大戦没

者の遺稿集である『はるかなる山河に』（東大協同組合出版部、1948年）が刊行され、次に全国の学生の遺稿を対象に新たに「日本戦歿学生の手記」を計画中で、「二月末日」が締め切りとなっていた。「すでに集まったものの中から選んだもの」として良司の遺稿が筆頭に、次いで田坂徳太郎（日大医専）の手紙が、それぞれ1ページで掲載されている。つまり、早くに応募された遺書中の2本の指に入ったということである。この時に掲載されているのは第3の遺書であり、本文を照合すると、冒頭の所属や生年月日、本籍、現住所、出身校の部分と、表題及び書き出しの一文、すなわち「所感／栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊とも謂ふべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光栄之に過ぐるものなきを痛感致して居ります」が削除され、「昭和二十年五月十日（最後の出撃前夜）／遺書」という文言を加筆、「思えば…」と現代仮名遣いに直された本文が始まる。

ここで言及されている遺稿刊行計画によって実際に刊行されたのが『きけわだつみのこえ 日本戦歿学生の手記』（東大協同組合出版部、1949年）ということになる。良司の遺稿は、第2の遺書がプロローグに、そして第3の遺書が本文に収録された。しかし、収録の際遺稿の文言は編集を加えられており、原本とは大きく異なる箇所がある。

その後、良司の遺稿に関心を持った松本深志高校教諭の中島博昭の編纂によって『あゝ祖国よ恋人よ』（1985年）が刊行され（2005年に再編集の上、信濃毎日新聞社より再刊）、第1・第2・第3の遺書全てが原典から書き起こされた。ただしこれも表記などは原文と異なっている。中島は日記やメモなどの他の遺稿も丹念に目を通し、そこに良司の思想の成長過程を見出し、三つの遺書を位置づけていった。

さらに『新版きけわだつみのこえ』（岩波書店、1995年）では、東大協同組合出版部の最初の出版時の添削の修正が図られ、良司の第3の遺書をプロローグに、第2の遺書を本文に移している。また新たに日記の抜粋が本文に追加された。

内容の精査という点では、中島の研究が最も詳しく、その位置づけが広く通説的に扱われている。しかし、原典を丁寧に点検してみると、中島の見解にも疑問点が多くある。以下では遺稿の添削の経緯や3つの遺書の執筆時期を検討してみよう。

『きけわだつみのこえ』の遺稿編集については、保阪正康『「きけわだつみのこえ」の戦後史』（文藝春秋、1999年）で詳しく論じられている。『きけわだつみのこえ』刊行当時は特にGHQの検閲という問題があり、また遺族等から投稿された際の、筆写の誤字脱字や改変は確認が困難であったことは否めない。これらに加えて紙不足という問題も深刻であった。

良司の遺稿についても、原文と対照すると、明らかな削除部分に加えて、良司の独特の書き癖による書き起こしの際の誤読と思われる部分も散見される⁽¹⁶⁾。

下記に改めて第2、第3の遺書の原文書き起こしを掲載し、『きけわだつみのこえ』の初版との異同を示してみたい。なお、表記の統一による漢字の字体や送り仮名、仮名遣い、漢字の置き換えなどは示さず、あくまで文言の加除や変更といえるものに限定して一律に掲げることとする。

*取り消し線は『きけわだつみのこえ』における削除箇所

*〔 〕は『きけわだつみのこえ』の加筆

○第2の遺書⁽¹⁷⁾

〔遺書〕

生を享けてより二十数年、何一つ不自由なく育てられた私は幸福でした。温き御両親の愛の下、良き兄妹の勉励に依り、私は楽しい日を送る事が出来ました。そして、少々もすれば、我儘になりつゝ、あった事もありました。この間、御両親様に心配を御掛けした事は兄妹中で私が一番でした。それが、何の御恩返しもせぬ中に先立つ事は心苦しくてなりません、忠孝一本、忠を尽す事が、孝行する事であると云ふ日本に於ては、私の行動を御許し下さる事と思ひます。

空中勤務者としての私は、毎日\／が、死を前提としての生活を送りました。一字一言が、毎日の遺書であり遺言であったのです。

高空に於ては、死は決して恐怖の的ではないのです。この儘突込むで果して死ぬのだらうか。否、どうしても死ぬとは思へません〔でした〕。そして、何か斯う、突込むで見たい衝動に駆られた事もありました。私は決して死を恐れては居ません。寧ろ嬉しく感じます。何故なれば、懐しい龍兄さんに会えると信ずるからです。天国に於ける再会こそ、私の最も希はしい〔ましき〕事です。私は所謂、死生観は持って居ませんでした。何となれば死生観そのものが、飽まで死を意義づけ、価値づけようとする事であり、不明確な死を怖れるの余り、なす事だと考へたからです。私は死を通じて天国に於ける再会を信じて居るが故に、死を怖れないのです。死をば、天国に上る過程なりと考へる時、何ともありません。

私は、明確に云へば、自由主義に憧れてゐました。日本が真に永久に続く為には自由主義が必要であると思ったからです。之は、馬鹿な事に聞〔見〕えるかも知れません。それは現在、日本が、全体主義的な気分包まれてゐるからです。併し、真に大きな眼を開き、人間の本性を考へた時、自由主義こそ、合理的〔に〕なる主義だと思ひます。

戦争に於て勝敗を見〔え〕んとすれば、その国の主義を見れば、事前に於て判明すると思ひます。人間の本性に合った、自然な主義を持った国の勝戦は火を見るより明であると思ひます。

日本を昔日の大英帝国の如くせんとする、私の理想は空しく敗れました。この土は只、日本の自由独立の為、喜んで命を捧げます。

人間にとっては一国の興亡は、実に重大な事ではありますが、宇宙全体から考へた時は、実に些細な事です。驕れる者久しからずの例へ通り、若し、この戦に米英が勝つたとしても、彼等は必ず敗れる日が来る事を知るでせう。若し敗れないとしても、幾年後かには、地球の破裂に依り、粉となるのだと思ふと、痛快です。加之、現在生きて、良い気になって居る彼等も必ず死が来るのです。唯、早いか晚いかの差です。

離れにある私の本箱の右の引出に遺本があります。開かなかつたら左の引出を開けて釘を抜いて出して下さい。

ではくれ\／も御自愛の程を祈ります。大きい兄さん清子始め皆さんに宜しく。

ではさよ〔う〕なら御機嫌良く。さらば永遠に。

御両親様へ

良司より

○第3の遺書⁽¹⁸⁾

五六振武隊—陸軍少尉—上原良司

大正十一年九月廿七日生

本籍—長野県東筑摩郡和田村—一七三

現住所長野県南安曇郡有明村—一八六

出身校慶應義塾大学経済学部

所感

栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊とも謂ふべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ身の光榮之に過ぐるものなき〔し〕を痛感致して居ります

思へば長き学生時代を通じて得た信念とも申すべき理論万能の道理から考へた場合これは或は自由主義者と謂はれるかも知れませんが自由の勝利は明白な事だと思ひます。人間の本性たる自由を減す事は絶対に出来なく例へそれが抑へられて居る如く見えても、底に於ては常に闘ひつゝ、最後には必ず勝つと云ふ事は、彼のイタリヤのクローチエも云つて居る如く真理であると思ひます。権力主義全体主義の国家は一時的に隆盛であらうとも必ずや最後には敗れる事は明白な事実です。我々はその真理を今次世界大戦の枢軸国家に於て見る事が出来ると思ひます。ファシズムのイタリヤは如何ナチズムのドイツ亦、既に敗れ、今や権力主義国家は、土台石の壊れた建築物の如く、次から次へと滅亡しつつあります。真理の普遍さは今、現実によって証明されつゝ過去に於て歴史が示した如く未来永久に自由の偉大さを証明して行くと思はれます。自己の信念の正しかつた事この事は或は祖国にとって恐るべき事であるかも知れませんが吾人にとっては嬉しい限りです。現在の如何なる闘争もその根底を為すものは必ず思想なりと思ふ次第です。既に思想に依つて、その闘争の結果を明白に見る事が出来ると思ひます。

愛する祖国日本をして嘗ての大英帝国の如き大帝国たらしめんとする私の野望は遂に空しくなりました。真に日本を愛する者をして立たしめたなら日本は現在の如き状態に~~は~~或は追ひ込まれなかつたと思ひます。世界何処に於ても肩で風を切つて歩く日本人これが私の夢見た理想でした。

空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人が云つた事は確かです。操縦桿を採る器械、人

格もなく感情もなく勿論理性もなく、只敵の航空母艦に向って吸ひつく磁石の中の鉄の一分子に過ぎぬのです。理性を以て考へたなら実に考へられぬ事で強ひて考ふれば彼等が云ふ如く自殺者とも云ひませうか、精神の国、日本に於てのみ見られる事だと思ひます。一器械である吾人は何も云ふ権利ありませんが唯、願はくば愛する日本を偉大ならしめられん事を、国民の方々に願ひするのみです。

こんな精神状態で征ったなら勿論死んでも何にもならないかも知れません。故に最初に述べた如く特別攻撃隊に選ばれた事を光栄に思つて居る次第です。

飛行機に乗れば器械に過ぎぬのですけれど、一旦下りればやはり人間ですから、そこには感情もあり、熱情も動きます。愛する恋人に死なれた時自分も一緒に精神的には死んで居りました。

天国に待ちある人、天国に於て彼女と会へると思ふと死は天国に行く途中でしかありませんから何でもあります。明日は出撃です。過激に亘り、勿論発表すべき事ではありませんでしたが、偽はらぬ心境は以上述べた如くです。何も系統だてず、思った儘を雑然と並〔述〕べた事を許して下さい。明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。

云ひたい事を云ひたいだけ云ひました〔。〕無礼を御許し下さい。ではこの辺で

出撃の前夜記す

両者を見比べれば明らかなように、第2の遺書に大幅な削除が加えられている一方で、第3の遺書には大きな変更が行われていないことがわかる。この経緯について検討する前に、これらの遺書の執筆経緯についてももう一度考えてみたい。

中島博昭は「三通の遺書はそれぞれ彼のその時点における思想変革の到達度を示している」としそこに「彼一人だけの、孤独な思想闘争」を見出す。そして第1の遺書と第3の遺書に「同一人物の手記かと疑うほど、そこには大きな思想の発展、変革がみられる」といい、「彼は自己の思想の発展、体系化に挑み、それは見事に成功した」とする⁽¹⁹⁾。そして第2の遺書から第3の遺書の間にも「大きく違う前進した面があった」とし、後者には「自由主義の正しさに対する確信がここには堂々と主張されていた。……自由主義こそ絶対捨ててはならない、未来永劫・普遍的な真理と観れるに至った歓びが信念となつてほとばしり出ていた」とする。また「戦後の祖国の行く末を国民の努力に『お願いする』』という、他の遺書には見られぬ核心が据えられた」というように、第3の遺書を到達点として極めて高く評価するのである⁽²⁰⁾。

ところで、第1の遺書と第3の遺書は、執筆日が明確であるが、第2の遺書はそうではなかった。この点について中島は、「第二の遺書は、飛行学校へ入り、冷子の死を聞く昭和十九年二月から六月の間の帰郷した折に書かれた」⁽²¹⁾とし、「最初の遺書〔第1の遺書〕の中身より大きく前進したもの」とし「日本の敗北を見透し、悠久の大義に生きる死生観を否定した点で『情況追隨の論理』を超克した」とする。しかし「この遺書ではまだ自由主義の論理は体系的にとらえられず、実証性も弱く、『原則あり、帰結あり、みとおしある』形となつていなく、彼のめざす『体系的思想家』の理想には、まだかなりの努力が必要」なのだという⁽²²⁾。つまり日付が明確ではない第2の遺書は、第1の遺書と第3の遺書の間に位置する思想的にも未完成の過渡期に位置づけられているわけである。現在ではこの中島説が通説化しており、良司の遺書を読み解くいくつかのその後の文献にもこの時期推定が援用されている⁽²³⁾。

しかし第2の遺書が死の1年以上前に書かれたという根拠について中島は「内容と残し方から判断して」と記しているだけで、具体的には示されていない。「帰郷した折」という点についても、そもそも19年2月から6月の間に良司が帰郷したという事実は知られていない⁽²⁴⁾。またこの時期の内容としては、「空中勤務者としての私」云々を語るには早過ぎるであろう。

注意すべきことは、良司の立場で考えたとき、第3の遺書は、高木との出会いがたまたま結実して残されたものであるから、本来の良司のプラン中にはないものだった、という

ことである。第2の遺書は、自分の意思を自由に残せると考えた最後の帰郷のタイミング、すなわち昭和20年4月上旬に残したと見るのが自然である⁽²⁵⁾。特攻隊員は、陸海軍とも出撃前に最後の帰郷を許されるのが通例であり、その時が、良司にとっては次がない最終形態の遺書を記す唯一の機会であった。また、第2の遺書は両親に明確に宛てたものであるが、第3の遺書は、報道班員（取材記者）に求められて書いたのであるから、性質や書き方が変わるのも自然なことである。両親宛の遺書で「国民の方々に願ひする」とことは考えにくい。少なくとも第2と第3を並べて読むことは想定しておらず、内容に重複が多いのは当然のことといえる。手許に何の用意も無く即興で書くことになった第3の遺書の方が文章としての鋭さが増しているのも、また自然であろう。従って第2→第3に「かなりの努力」を要した思想の成長を見るのは少々牽強付会といわざるを得ない⁽²⁶⁾。この点は、資料を俯瞰できる後世の視点に立っていることを注意しなければならない。ただし、良司の稀有な点は、高木の求めに応じて、単に心境を記すのではなく「国民の方々に願ひする」といった大上段の視座から書いたことであろう。そしてこれが中島の評価している点でもある。

ところで、そうであるならば『きけわだつみのこえ』において、第2の遺書に大幅な修正がありながら、第3の遺書にはそれがないのは何故だろうか。このことについては保阪が言及しているように帝国主義的思想や死生観の強調などの観点から削除されたと考えることができる⁽²⁷⁾。しかしこの説明では、大英帝国を理想とするほぼ同じ内容が、第2では削除され、第3ではそのままであることを説明できない。

筆者はここで、初版の『きけわだつみのこえ』の割り付けに着目したい。良司の第2の遺書を採用したプロローグは、表に「きけ わだつみのこえ 日本戦歿学生の手記」、裏に「なげけるか いかれるか はたもだせるか きけ はてしなきわだつみのこえ」という詩の配された扉に続いて、第1ページに表題もなく突然始まり、めくって2ページ目の最終行で完結している。それに続く3ページは冒頭に「I」と章番号が打たれて、1人目の遺稿である石神高明の日記が始まる。初版の割り付けでは、プロローグとされた良司の第2の遺書は、表裏1ページにびたりと収まっているわけである。第3の遺書は、長短織り交ぜの多数の遺稿が並ぶ本文の一つになっている。この体裁に鑑みれば、第2の遺書の編集は、内容の政治性を考慮するというより、象徴的なプロローグとして文意を明瞭にし、かつ1ページ表裏に収めるための圧縮が主眼にあったのではなかろうか。保阪は用紙不足が深刻で、330ページ以内に収める必要があったことにも言及している⁽²⁸⁾。

ところがこの体裁は、昭和34年の光人社カッパブックスによる再刊時、考慮されなかった。従って1ページの文字数が2段組の影響で増えたために良司の第2の遺書は1ページ半に収まり、最終行に続いて「I」が追い込みで組まれ、下段から石神の本文が始まっている。さらに岩波文庫（旧版）でも追い込みの割り付けが踏襲されている。

上記のように、確かに良司の遺稿に内容上の添削が行われているわけだが、第2の遺書の添削については、思想面での添削意図だけでは説明できておらず、紙幅の都合による編集という事情が大きく作用した可能性があることを指摘しておきたい。

▶ 2. 悲恋の物語の誕生

上原良司の遺書がユニークとされる所以の一つは、意中の恋人の存在である。特に遺本の中の、恋人への暗号メッセージは興味深い逸話として語り継がれている。良司の「恋人」の存在は、『きけわだつみのこえ』に収録された第3の遺書に、自ら明確に書いてあるので読者の知るところとなったが、そこには名前などは記されておらず、また同書には他にも恋人や妻の存在に言及されたものがあり、その中の一つに過ぎなかった。慶應義塾

大学出身では、『第二集 きけわだつみのこえ』に遺稿が収録されている宅島徳光が恋人の八重子⁽²⁹⁾に宛てて独白形式で記した日記がよく知られ、『くちなしの花』の表題で単行本にもなっている⁽³⁰⁾。

良司を恋人の存在から取り上げた記事の最初としては、管見の限り「愛情は炎と燃えて！戦歿学生の愛人への遺書」（『読物時事』1950年2月）であるようだ。さらに暗号メッセージのことを紹介したのは、文芸春秋新社週刊文春編集部編『人物太平洋戦争』（1961年）といわれ、その後『あゝ祖国よ恋人よ』（1985年）、『新版きけわだつみのこえ』（1995年）で、広く知られるようになっていったものと考えられる。

また東映映画『きけわだつみの声 Last Friends』（出目昌伸監督、1995年）では、仲村トオル演じる芥川雄三少尉が上原良司をモチーフにして描かれている。劇中で芥川は病院の跡継ぎで、故郷に片思いの恋人三千代がいる。そして特攻出撃直前の最後の帰郷で恋人の死を知り、恋人の面影を心に浮かべながら家族と故郷に別れを告げるシーンが印象的に描かれている。

実際に良司が思いを寄せていた女性・石川冷子は、良司とは複雑な関係である。良司の父寅太郎は早くに父を亡くし、遠縁で家計に余裕があった医師の青木茂登一の元に預けられ、その実子青木貞章と共に育った。そこで共に養われていたのが、後に陸軍中將となる石川浩三郎である。青木貞章・石川浩三郎・上原寅太郎の3人は「義兄弟」と称して生涯家族ぐるみで交流した。冷子はその石川浩三郎の長女である。彼女は、昭和18年夏に、『あゝ祖国よ恋人よ』の表現を借りれば「父浩三郎の部下であったN少尉」と婚約し、翌年早々に結婚式を挙げたが、既に結核に冒されており、5月11日に死去する。

この石川冷子への恋心を、良司は自らの戦死を予期して口にできずに終わったとされ、その死を聞いた日の日記には「俺は本日死したり」と書きつけた⁽³¹⁾。中島博昭はこの良司の心を「行きどころのない愛情は紅蓮の炎となって若い心の中を荒れ狂い、焼きこがす。まさに紅蓮地獄である」とし、戦争が彼の告白の機会を奪い、暗号を隠すという「非人間的な精神状況に若者を追い込んだ」としている⁽³²⁾。そして中島により編纂された良司の遺稿集は『あゝ祖国よ恋人よ』と題され、表題に「恋人」の存在を大きく示している。さらに初版（昭和出版、1985年）の表紙は、良司が搭乗した三式戦闘機飛燕の背後に若い和服女性の姿が描かれた油絵を使用している。また新版（信濃毎日新聞社、2005年）では、飛行服姿で腕を組む良司の有名な写真が右側に配され、その左背後に大きく冷子の顔写真が配されている。

良司の遺稿は、その果たせぬ恋の「悲劇性」とセットで語られているのである。

しかし史実としては、どうであろうか。良司は冷子の死を受けて、「己が冷子チヤンヲ貫ツタラ決シテ死ニハサセナカツタノニ。野口大尉ノ無智。彼ハ真ニ彼女ヲ愛シテキナカツタノダ。若シ愛シテ居レバ彼女ハ救ヘタノダ。一時ノ慾望。或ハ政略的結婚ノタメニ彼女ヲ死ナセタコトハ許サレヌコトダ。彼女ハ不幸ダツタ」⁽³³⁾と書いている。

筆者らは、上原家調査の一環として石川冷子の実弟である石川凱一の聞き取りを行ったが、その際、下記のように「野口大尉」の説明メモを頂いた。

結婚相手の野口美喜雄さんは、松本中学出身の陸士52期生で、同郷の縁で候補生時代から我が家に交流し親しくなったようです。松本の歩兵50聯隊の聯隊旗手を務められ、満州へ出征後昭和18年に予科士官学校の区隊長に異動になり、結婚を決意したようです⁽³⁴⁾

野口は冷子と死別後、陸大に進み、内地で終戦。戦後は陸上自衛隊に入隊し、後に空自へ転じて最後は空将となった。そして晩年は千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会理事長を務めている。

客観的に見て、良司は意中の思いを告白できず、それは戦争を背景とした理由も手伝って不幸であったが、野口に対する言説は、まさに若き青年の恋愛の「紅蓮」の中から生まれたもので、公平とは言えない。

冷子の家族は、この結婚を必ずしも不幸であったとは受け止めていない。石川凱一は野口に対して好印象を持っていた⁽³⁵⁾。また、石川家に残る写真を見ると、野口は早くから石川家のきょうだいと親しいつきあいがあり、例えば昭和14年10月23日付で石川家の4にきょうだいと野口が成田公園で仲睦まじく収まる写真が残されている。これまでの冷子像は、良司が一方的に抱いていた感情や印象（ある部分は思い込み）による記述の側からのみ語られていた。それ自体が若さや悲劇性を持っているとはいえ、野口に対しては一方的に酷な評価を浴びせていたのではないか。良司の日記を紹介する際「N大尉」と本名を伏せたこともかえって悪印象を読者に強めたであろう。

この問題については、さらに他の要素も見逃すことができない。『あゝ祖国よ恋人よ』では神村（旧姓師岡）みゑ子という女性の存在にも言及され、インタビューが収録されている⁽³⁶⁾。みゑ子もまた、良司が好意を寄せた女性であるが、同書では、みゑ子はあくまで本命ではなく、結局は良司の冷子への一途さを補強する役回りを与えられている。このような捉え方は、後述するように、高木俊朗によるラジオ番組において語られたところに添っている。みゑ子自身もこのインタビューの中で、「正直に言って、冷子さんがいたってことがわかり、わたしの気持ちは、良司さんを眺められることができるようになりました。良司さんと冷子のことを知らなかったら、たまらなかったと思うんですよ。冷子さんがいて下さったことで、わたしはある程度解放感を感じました」⁽³⁷⁾と語っている。

しかし、筆者は上原家の資料調査の過程で、『あゝ祖国よ恋人よ』において初めて紹介された遺稿には、冷子に対する良司の一途な思いを強調する方向での文章の修正が見られることに気がついた。そもそも同書は「表記については、原文を尊重しながら本書が学術書ではなく、読者を一般対象としている」として読みやすさを重視して仮名遣いなどを全面的に変更していることが明記されている⁽³⁸⁾。しかしながら、単に読みやすさへの配慮の範疇を超え、明らかに内容の取捨が認められ、特に心を寄せる女性に対する記述は修正が際立っている。

筆者の知るところでは、冷子、みゑ子の他に、なお3人の女性への特別な感情を知ることができる。その一人は百合子という青木家の親族の女性である。彼女はアメリカ出身でリリーとも呼ばれており、来日中であったが、昭和15年中に帰国して結婚してしまう。もう一人は遺書にも登場する「耿姉さん」こと青木耿子で、既婚者であり恋愛対象とまでは言えないが、特別な思いを寄せていたことが窺える。さらに3人目は江口瑠璃子で、陸軍入隊後に訓練地の佐賀県目達原の基地内で出会い、良司が最後に思いを寄せた女性である⁽³⁹⁾。これ以外にも、電車内で出会う女性に思いを寄せる記述が存在している。

本稿の目的は、恋多き良司を晒すことではない。しかし取捨された情報によって、実像とは異なる良司像がつくられていったことを検証するために、今少しこの問題を詮索する必要がある。

良司の昭和15年～16年頃の断続的な日記である「文集（他人見るべからず集）」⁽⁴⁰⁾には、特に取捨が顕著である。いくつか例を挙げてみよう。『あゝ祖国よ恋人よ』で掲載されている昭和15年11月9日と16年1月6日の間に「彼女」という題で、電車の中（予備校への行き帰りか）で出会う気になる女性のことを、長文で描写している。「端正にして気高さのある」その女性は、「何分の一秒かの間」に良司の「眼底に焼きつけられ」る。そして「それ以来彼女に出会ふのを毎日望む様になった。彼女の赤い外套と、ぼんやりした輪郭だけが頭に残った」。3度目に目撃したとき、視線が合い「幾分はゝえんだ様に見えた」ことを気のせいかもしれないと思いつつ、「併し確かにこちらを見た目に好意のあ

るのを見た。これは自惚であらうか？ そのためか今日は非常に楽しかった。こんな事を書くのは余り露骨かも知れないが私の本心である」とある。日記に向き合う良司は赤裸々で多弁である。しかしこの記述は完全に削除されている。

また、「16.1.19 美恵子ちゃん」と見出しのある記載では、前述のみゑ子について言及しているが、ここでは、部分的な削除が行われることで、「百合子」の存在が消されている。

(前略) 彼女〔美恵子〕は背丈が高いことは高いが、やせて居るからあまり体格のよい方ではない。顔もシャンと迄はゆかないだらう。併し私がチャームされたものは和服の立姿とその性質と声である。

美恵子ちゃんの声は私の永遠の心の恋人である百合子ちゃんのそれと余りにもよく似て居る。これが私をチャームした一原因である。又気だても確固としてをり、頭も相当良いらしい。

(中略) 私は非常にさびしかった。私のこのさびしい心を慰めてくれるものは、勉強だ。さあ勉強しよう。そして慶應を突破しよう。その暁には彼女は自然私のふところに飛び込んで来るであらう。

I love Miss. Mieko.

My heart's love is Miss. Yuriko.

She has gone to U. S. and married with her old lover.

I was very disappointed, but instead of the pail, I found my love Miss. mieko

I am very delightful now.

敬愛する美恵子嬢

昭和16年4月22日には、日常的に世話になっている青木耿子の些細な発言をきっかけに嫌悪感を抱く長文の記述があり、それに続く10月6日の記述では「私は何と気の変る男だらう」との出だしで、今度はその悪感情を解き、「私は思慮の浅かったことをなげく。同時に心の狭かったことも」と反省の弁を記している。これらも全面的に削除されている。

昭和17年2月2日の「愛情」と題された一節では、「自分は今女の愛情に飢えてゐる。それと同時に満ち／＼た自分の愛情のはけ口をも、ひどく希求して居る」と書き出し、愛情と恋の違いとは、「愛情は一方的なものであり恋は相対的なものである」として、自分はその意味で初恋は未経験であるという。そして以下のように続くが、やはり長文が削除され、しかも一部分は飛び飛びで残されていることによって、文意が大きく変化してしまっている。

(前略) 今の自分の気持は前にも述べた通り、自分の愛情が集中出来る女性を求めてゐるのだから、即ち愛情であるから一方的なのである。そして、それで自分は満足出来ると思ふ。併しいくら一方的な愛情であっても、幻影に対しては抱くことは出来ても、それは泡の様なもので、幻影の消えると同時に消えて了ふから、その一瞬／＼はよいが、時間的に連続することが難しいから、集中は出来ない。即ち真の相手が実在しない限り或は実在しても自分の身近にゐない限り、それは出来得べくもない。現にミスリリーの例を取って見るなら、自分はミスリリーに対して愛情を持てゐた。それはだん／＼なれるに、従つていよ／＼深いものになつて居た。しかるに一旦ミスリリーが渡米して以来一月たち、三月たち、半年たつ間に彼女に対する愛情はだん／＼薄れて行くのを発見した。そして終にはミスリリーの写真を見なくては、その顔を思ひ出すことが出来ず、その声もだん／＼記憶から遠ざかり、写真を見て、顔立は思ひ出しても声は聞くことが出来ず、それは徒らに、死人と化して行く。そして最後にはその人が再び未知の人となるのではないかと心配してゐる。勿論自分の理想の女性はリリー（百合子ちゃん）である。自分が美恵子ちゃんに愛情を感じたのもその人の声が余りにも彼女に似て居るからではないか。その理想の女性たるリリーの記憶がだん／＼薄れ行くある自分は どうしたらよいだらうか。自分はこの点をなやんだ。そして、こんなことをしておいたら、遂にはあらゆる女性が気高く上品で教養ある様に見えるのではないかと。そこで自分はその理想の女性を、すぐ身近に持たうと心がけた。そして耿姉さんに注意し始めた。一年はまた

たく間に過ぎた。そして自分は自分の目の高いのに驚いた。何となれば、一年を通して、耿姉さんは理想の女性たりと認めることが出来たからである。

リリーの場合は、すぐこれが自分の理想たる女性なりと、認めることが出来たが、耿姉さんの場合はそうは行かなかった。やはり、長い月日を要した。

今や日本は過渡的な時代に遭遇してゐる。自分の愛情の目標も過渡期的なものとなつてゐる。従来は愛情が求めてゐたのは、百合子ちゃんらしい女性であった。然るにこれからは愛情の注ぐことの出来る相手は耿姉さんらしい女性であるのだ。

それにしてもKちゃんは、どうしてゐるだらうか。自分が初めての愛情を感じ私かに期待する所の女性は彼女であつたが為に近頃はひどく心配だ。一時は毎晩彼女の夢を見ることがあつた。別に話はしないのに、帰りに一緒に電車に乗ってくればよいと願つたことも、しばしばだつた。それを、こちらに来てからは、全然会はず休みに帰省しても、不思議な位一遍も会はない。従つてだん／＼記憶もうすう／＼、今では彼女の顔さへ浮んで来ない。リリーと違って写真がないから忘れる一方でどうにもならぬ。もう大分大きくなつてゐるだらう。今年はまだ三年生かと思ふ。一度会つたらと思ふこと切なれど、この三年間に一度も会はない。一度会つたら自分は果して理智的な態度を取り得るか、自分にも解らない。

自分が五年の時、□□で呼びとめられて、林の落し物を托せられたその際少しバックした。その時彼女も丁度登校の時ばかり行き違ひになつた。自分は、彼女を初めてと云つていゝ程身近に見た。何となれば田舎と云ふ環境は自分の情熱を固くしぼつて居たから、彼女は赤くなって下を向いて歩いて居た。この時の光景は一枚の写真の如く頭に残つてゐる。併しその写真の肝腎の彼女の顔の所は、輪く小さくしか残つて居ない。二人して歩いて来ながら、自分に会ふと、赤くなって下を向いた彼女。初心だつた彼女。彼女も女子校三年どうして居るだらうか。

一度会ひたい。もう田舎と云ふ環境なんか怖れない。そんな野暮たい考へは怖るるに足らない。三年にわたる都会生活で自分の心は、何をも怖れない心となつた。青年の熱情を抑へ、女性の愛を固く、とちこめてゐる館は破る必要がある。自分は勇気を養ふことが出来た。只情熱に従へと云ふ勇気を。

必要に迫られて理想の女性を変へざるを得なかつたが、理想の女性を持つと云ふことは、本当に必要ではないかと思ふ。その女性がよい尺度となつてくれるからだ。

都会生活をしてゐる間、この三年間に知つた若い女性は、知つたと云つても、一人は録に話もしなかつたが、四人である。この四人の中のどの一人にも自分は愛情を注ぐことが出来ない。過去、幾分でも愛情の流れた、女性と云へば、それは美恵子ちゃんである。冷子ちゃんと会つた時は、今だ自分に本〔相〕当の勇気が欠けて居たので話も出来なかつた。向ふでは、あつてなく感じたことであらう。

こんなわけで現在愛情の対称者^{〔象〕}を見附けることを、その新しい相手の出ることを望んでゐる。このことを神様にお祈りして寝よう。

神よ我に恵みを与へ給へ。〔終り〕

ここでは、百合子と冷子に対する気持ちを詳しく述べ、耿子とみゑ子についても触れているが、やはり全面的に削除されており、ただ末尾の数行の一部分が残されている。冷子の部分だけが残されたことにより、あたかも最後の神に祈る文言が、冷子に告白する勇気を求めているように読めてしまう。しかしその前に「愛情の対象者」となる「新しい相手の出ること」を祈っていると明記されているのである。

昭和18年の「朝日日記」⁽⁴¹⁾でも所々に削除が見られるが、8月10日に青木家で冷子の婚約を知つた記述は、やはり百合子を削除することで、冷子だけに思いが向いていたように文意が変わつてしまつてゐる。

八月十日（火）

悲しき日。勤勞奉仕より帰りて久し振りに馬橋へ伺ふ。今日は行かなければよかった。否、行つても聞かなければよかった。彼女の結婚の相手が、きまつたことを。

併しそれは前から話のあつたことだ。百合子ちゃんしろ、冷子ちゃんにしろ、自分の愛情をすっかり、注ぐことが出来ると信じてゐた〔。〕女性は何故揃ひも揃つて他の男の許嫁であつたのだらう。私はあなたを愛してゐると、何度告げようと思つたことか。併し、それは私の良心が許さなかつた。告げることは易い。併し、彼女にその後に来るべきことによつて不幸にして丁うのでは、私が彼女達を愛してゐると云ふ理由は何処に行つて了ふのか。今后も私は心秘かに、彼女の幸多からんこと

を祈らう。それにしても百合子ちゃんはどうしてゐるだろう。不幸なるもの、そは汝なり。

このようにして良司の「恋人」としての石川冷子の存在は、より明確な形へと整えられ、読者に提示された。それによって上原良司の遺書と、冷子の存在は切っても切れない存在となり、良司の「悲劇性」を補強することになったのである。

▶ 3. 訣別の「さようなら」の誕生

映画『きけわだつみの声 Last Friends』（1995年）では、仲村トオル演じる芥川少尉が上原良司をモチーフにしていることは先に述べた。芥川は出撃を前にして故郷に帰り、家族との時間を過ごし、最後に妹と母が見送りを終えた後、背後から「さようなら」という叫び声を聞き、芥川の帰郷が最後のお別れだったことを知る。そこで郷里の風景が映し出され、そして上原の遺書の一節が読み上げられる。

この「さようなら」のシーンもまた、良司の実話を下地にしており、自由主義者を自称する遺書と、恋人の存在に加えて、「特攻隊員上原良司」の第3の要素となっている。良司が「さようなら」と叫んだとされるのは穂高川（乳房川）にかかる乳房橋で、良司の兄良春が撮影した戦前の姿や、その周辺で上原家のきょうだいが地元の子供たちと一緒に川遊びをしている写真も残されている。後方に有明山の端正な山容を中心とする北アルプスの山並みを見ることができるところで、良司自身、第1の遺書の末尾に、「ふるさとの山に向ひて云ふことなしふるさとの山はありがたきかな」「かにかくに有明村は恋しかりけり思ひ出の山思ひ出の川」と、石川啄木の歌になぞらえて書き付けていることも相まって、最後の帰郷で「さようなら」を叫ぶ、絶好の舞台となっている。

中島博昭は『あゝ祖国よ恋人よ』において、乳房橋の写真を口絵に掲載し、解説では次のように記している。

わが家を離れて軍隊へ帰るとき、家から少し離れた乳房橋のたもとから遙か遠くに見送る家族に向かって「さようなら」と三度も言って別れを告げた。これまで聞いたことのない大きな声を聞いて母親のよ志江は「良司は死ぬ気でいるんだな。最後の別れに来たんだ」と思ったという。その辺りは良司が幼い頃、兄たちや近所の子もたちと遊んだ懐かしい場所であった。目の前に有明山が聳えている。「さようなら」は家族だけに対してでなく、故郷や自分の過去への別れでもあったのではないだろうか。⁽⁴²⁾

さらに解説を次の一文で締めくくっている。

（敗戦から）一年も経たぬ二十一年四月二十六日、あの「さようなら」を三度告げた乳房橋を、小さな骨壺に納まって無言で帰郷する良司であった。⁽⁴³⁾

この「さようなら」のシーンは、中島にとっては良司が遺書の中で「愛する祖国日本」の将来を「国民の方々」に託したという理解に呼応する、という意味において重要な意味を持っていると考えられよう。

中島は平成26年の地元紙『市民タイムズ』において「平和のシンボル 乳房橋」⁽⁴⁴⁾という記事を書いており、「最後の別れに帰郷し軍に戻るとき、乳房橋で見送る家族に「さようなら」と3度叫んだというエピソードは、いままでは何げなく見てきた橋を強烈な平和のシンボルに変えました」とし、写真のキャプションは「上原良司が家族と最後の別れをした乳房橋」とある。近年では、平成23年8月日本テレビ系列の報道番組「NEWS ZERO」においてキャスターの桜井翔が有明山を背後に、乳房橋の上を上原清子の車いす

を押す姿が放送され⁽⁴⁵⁾、平成29年8月にもテレビ東京「日曜ビッグバラエティ 池上彰の戦争を考えるSP」で、同様にこの橋が紹介された⁽⁴⁶⁾。

しかし実際に訪れればわかるが、乳房橋から上原家の門前は500メートル近くも離れており、そこから叫んでも門前で見送る母たちに届くとは考えがたい。上原家の隣家の井ノ口家の親族によると、家にいた者が良司の声に驚いて慌てて後を追ひ、駅まで見送ったと聞いているという⁽⁴⁷⁾。関係者の声を総合すると、上原家から乳房橋へと向かう道の途中で今では失われた坂があり、実際に叫んだのはその傾斜で家が見えなくなる辺りではないかといひ、それはおおよそ家から100～150メートル程度の場所である。

この乳房橋の情景が登場した最古の例は、昭和44年に放送されたTBSラジオ「愛の戦記」という番組で、良司が第3の遺書を手渡した高木俊朗その人がパーソナリティーを務めていた。この番組は戦時下の様々な無名の人々のエピソードを、ギターの演奏を挟みながら語るもので、「作・構成並びに朗読高木俊朗、ギター演奏は中林淳眞」と紹介されている。番組の製作方法については各回の最後に次のように説明して、リスナーの協力を求めている。

この番組はあなたの父、母、あなたの息子、娘、そしてあなた自身の物語です。太平洋戦争中の愛の記録を係までお寄せください。日記、手紙、石、ノートの切れ端、何でも結構です。高木俊朗さんがお持ちのたくさんの資料で、肉を付け、心を込めて放送します。…（住所略）…あなたの資料は大切に取り扱い、必ずお返しいたします。また放送に採用させて頂きました方にはお礼をさせて頂きます。

上原良司が取り上げられたのは、昭和44年10月6日～18日の計12回であった。幸い上原家に音源のテープが所蔵されており、以下にその概要を要約する。

番組は戦後16年目に届いた「コウヤマさん」（仮名）という女性からの「上原少尉の気持ちが知りたい」という手紙から始まる。高木は「幸福な人妻」が、「死んだ人の気持ちを知りたい」というのはどういうことなのだろうか」（第3回）と語り、良司の思い出を語り出す。高木は良司の遺書の一つ（所感）を「私が持っている」と語り、そこには「愛する恋人」の死について記されており、「コウヤマさんは恋人ではない」と推測する（第4回）。高木は、良司の遺書に「自由主義者」であることなどが記されていたことを語った上で（第5回）、コウヤマと良司が親類で、学生時代に上高地にピクニックに出掛け、「乙女心に忘れがたい思い出」を残していること、良司の学徒出陣後に手紙のやりとりを開始したが、良司が自由主義の考えを持ち続けたことをコウヤマが「非難」して「喧嘩をしてしまった」と明かす（第6回）。コウヤマは吉祥寺の家を空襲で焼かれ、郷里松本市に戻ったところ、転送を繰り返して良司の手紙が届き、特攻隊員としてまもなく出撃すると書かれていた。コウヤマはすぐに喧嘩のことを詫言ひ「立派に戦ってください」と手紙に書いたが「受取人不在」で戻ってきた。コウヤマはその日の夕方、近所の神社で「上原少尉に手紙が届きますように」とそれを焼いた（第7回）。コウヤマは良司の遺品の中に自分のことがどのように書かれているか知りたいと書いてきた。高木は戦後まもなく上原家に両親を訪ね、「遺本」についてお母さんに尋ねたことを語る（第8回）。お母さんはすぐに遺本（クロオチェ）を見つけたと語る。高木はそこにコウヤマの名を見つけるが「愛情の表現」としてははっきりしないと感じる。続いて高木は本をめくって「きょうちゃんさようなら…」というメッセージを発見する。そして「冷子ちゃん」が「死んだ恋人」ということを知る（第9回）。良司の学生時代のノートには、「冷子ちゃん」のことが書いてあった。北アルプスから出てきて都会的ではない良司が思い詰めているうちに、冷子は、師団長の父の部下であるスギナカ大尉と「軍人として立身出世のため」の結婚をしてしまう。さらに昭和19年館林で訓練中に冷子の死を知る。軍隊手帳には冷子ちゃんの死を悲

しむ歌に続いてコウヤマも出てきており「ケイコちゃんに愛情を感じたのは、声が余りにあの人に似ていたからではないか」とあった（第10回）。高木は父寅太郎が良司に「嘘を言うな」「言いたいことはどんなことでも誰の前でも隠さず」ということだけは厳しく教えたと聞く。そうして、橋の描写が来る。

私が有明村から帰るときには、山裾まで雲が立ちこめて、時折雨が荒く降りかかりました。それなお母さんは、一緒に駅まで見送るに行くというのです。山に近いところですから、駅までは遠く、かなりの坂道です。三人の男の子を亡くして寝込んでしまったお母さんにはお気の毒だと思って、私は何度も辞退しました。それでもお母さんは私を送ってきました。上原家を出てしばらく行ったところに川が流れていて、橋が架かっていました。山国の川は、岩の間を音立てて、激しい勢いで流れていました。お母さんはソコに立ち止まりました。良司は特攻隊に決まってから一度帰ってきました。それでも特攻隊になったことは一言も言いませんでした。部隊に戻るとき、私が家の前で見送っていると、良司はこの橋の、このところで立ち止まって振り返り、大きな声でさようならと3度も言いました。今までに聞いたことのないような声でした。私はそれを聞いて感じました。ああ、良司は死ぬつもりでいるのだな。お母さんはしばらく橋のたもとに立ち止まっていました。離れがたい思いのようでした。（第11回）

最終回で高木は、軍隊手帳に「コウヤマさんの声を聞くと冷子ちゃんのことばかり思い出される」と書いてあり出撃の前日も「冷子ちゃんを思い出し続け」「死は天国への道筋」と書いていることを振り返る。そして最後に、コウヤマが、上原への届かなかった手紙の灰を今も大事に取ってあり「いつかは上原少尉のお墓にお参りをして、手紙の灰を供えたいと思っています。そうすれば私の気持ちも上原少尉に届くことでしょう」と締めくく。（第12回）

以上が、高木の構成によって放送された「愛の戦記」の概要であるが、既におわりの通り、「コウヤマケイコ」のモデルは師岡みゑ子のことであるものの、随所で事実とは異なる描写が見られる。ここではその詳細を挙げないが、「コウヤマさんの声を聞くと冷子ちゃんのことばかり思い出される」というのは、先に紹介した抹消された日記中に見える「美恵子ちゃんの声は私の永遠の心の恋人である百合子ちゃんのそれと余りにもよく似て居る」という記述を書き換えたものであろう。

そして本節との関係で最も重要なことは、上原家訪問後に、乳房橋に差し掛かる場面であり、ここもまた先述の通り、明らかに脚色された箇所ということになる。

したがって、高木はラジオ番組として構成する際に、郷里の印象的な情景の中に良司のエピソードを落とし込んだのである。このラジオ番組はあくまで高木が「たくさんの資料で、肉を付け、心を込めて放送します」として、フィクションが含まれることを明らかにしている。

このようにして、上原の遺書を語る要素の中に、郷里の風景が印象深く組み合わせられ、そして確立されていったのである。そして、中島はこのラジオの音声を『あゝ祖国よ恋人よ』の参考文献に掲げており、このエピソードもここから史実として取り入れたものと推測される⁽⁴⁸⁾。

本稿は、特攻隊の悲劇性を伝えようとする様々な営みの中で、ある発端となる事実を核として、様々な要素が付加され、遂には不動の「事実」となっていったことを跡付けることを主題とした。上原良司は、多くを語り、多くの端緒を与えてくれたがゆえに、彼の周囲には様々な豊かな拡張の余地が生まれた。こうして、語り継がれる「特攻隊員・上原良司」は誕生していったのである。

▶ おわりに

本稿においては、上原良司が学徒兵の「代表例」として、あるいは「例外的存在」として、頻繁に語られるその「絵になる」姿の由来を検証し、それらの表象が実は、ある時期に事実が取捨され、あるいは拡張される営為の介在によって、より印象深く、語られやすい姿へと整えられ、鋭く描き出されるようになったことを明らかにした。

イメージの強化が行われたとはいえ、核になっているのは、上原良司自身の強い個性であることに変わりはない。無数の死者の中で、「書き残す」という選択をした⁽⁴⁹⁾ことによって今日にまで議論を提供した彼を、批判的に検討することは重要であるが、学徒兵が思想的に精緻で無謬でなければならないという一種の強迫的発想が、良司像の変容を促したということをここで確認しておきたい。良司の思想は、戦歿学生の遺稿集に相応しい内容を求められて不適切と考えられた字句が添削され、その思想に相応しい潔癖な恋愛観を求められて女性たちの名前が日記から削除され、そしてその思想に相応しい情景を求められて故郷を見渡せる乳房橋での「さようなら」の絶叫シーンが生み出された。

しかし実際の良司には二面性が存在する。つまり時局に痛烈な批判を向ける理性的側面と、特攻出撃命令には抗さず（表面的であっても）「満足で一杯」と記し、大英帝国を理想と語る帝国主義的側面である。しかしそれが事実であり、実はその二面性こそが、矛盾に満ち、苦悩する彼本来の人間らしさであり、また悲劇性を示すのではなかろうか。彼の遺稿は到底完成された思想ではないのである。まず良司のありのままの姿を、当時の歴史の中に描き出すことが重要であろう。保阪正康のいうように「学徒兵たちのこのされた遺稿は、それ自体で読んではならない」のであり、歴史の中にありのままに位置づけて読まねばならないのである。

本稿は資料批判が主となり、メディア表象の展開を十分扱えなかったので、この点については別稿を期したい。

●注

*引用資料は、新字体に直し、仮名遣いはそのままとするが、変体仮名は現在の書体に統一した。句読点は、原則として資料の通りとした。また年月表記は、本文中では和暦を、書誌情報などを示す場合は西暦とした。

1. 近年の研究で、上原良司に1章を割いている例としては、亀岡敦子「人間の戦争遺跡・上原良司の思索」（『本土決戦の虚像と実像：一度は訪ねてみたい戦争遺跡』日吉台地下壕保存の会編、山田朗監修、高文研、2011年）。岡田裕之『日本戦没学生思想〈わだつみのこえ〉を聴く』（財団法人法政大学出版局、2009年）など。
2. 戦跡として観光地化された「知覧」の戦後史を特攻の「記憶」を通して論じた福間良明・山口誠編『「知覧」の誕生』においては、「遺書と「自由主義者」上原の名は特攻作戦で戦死した学徒兵の象徴として繰り返し語られてきた」とし、それは知覧特攻平和会館で展示される「報国殉死の決意や生前の感謝を述べる『軍神』の遺書」の中で「例外的な存在」とされている。一方で、良司が愛読書の羽仁五郎『クロオチエ』の中で「彼が恋心を通わせた故郷の女性へのメッセージ」を記したことが紹介され、それを展示する「ホテル館」が、特攻隊員の「人間らしさ」を伝え、特攻平和会館が伝える「正史」が伝えない「隠された真実」を伝承する存在と位置づけられ、「死を前にして煩悶し、恋もすれば家族への未練を断ち切れずに出撃した特攻隊員の『本当の思い』を後世に伝えようと努めているという」としている。山口誠『「知覧」の真正性』（『「知覧」の誕生』、柏書房、2015年）150-152頁。
3. 学徒兵を人類学の視点で分析した大貫恵美子『ねじ曲げられた桜』（岩波書店、2003年）では、学徒兵の読書歴に着目し、佐々木八郎（東京帝大）、林尹夫（京都帝大）、和田稔（東京帝大）、林市造（京都帝大）、中尾武徳（東京帝大）を取り上げているが、上原良司は読書歴の記録が乏しく、読後感などもほとんど書き残していないので分析対象となっていない。
4. 上原良司と同じく慶應義塾大学より学徒出陣した石井公一郎は『回想学徒出陣』（中央公論社、1993年）で、学徒兵の残した遺稿に「注釈を加えること自体が不遜のそしりを免れないが」と留保して、それらを敢えて分類するとしたら4つのパターンがあると分析し、「殉国派」「自然派／自然体派」「理性派」「アニミズム（万有靈魂説）派」に分けている。そして「理性派」の例として岡部平一（台北帝大）と共に上原良司を挙げ、「上原の手記は、既に多くの出版物に引用されているので詳述をばばかるが、自由主義の勝利を预言する彼の主

- 張は自信と気迫に満ちている」(82頁)と記す。
5. 乳房橋での別れを題材に、中島博昭作詞・竹村茂作曲の合唱組曲「乳房橋」が作られている(『信濃毎日新聞』、1994年5月31日付。ただし筆者は未確認)。また例えば長野県池田町に上原良司の記念碑が建立された際の冊子「生誕地池田町から上原良司のメッセージを発信する 良司の碑建立報告」(2006年)の最終ページには「良司がさようならと3回叫んだ乳房橋」との説明で橋の写真が掲載され、裏表紙の史跡マップには乳房橋の位置が示されている。
 6. 学徒兵一般に対して、鶴見俊輔「戦争と日本人」(『朝日ジャーナル』10巻34号、1968年8月18日)において学徒兵に反対犯罪(カウンター・クライム)の勇気が欠けていたという指摘や、安川寿之輔による『「わだつみ世代」学生兵の戦争責任』として「加害者たらしめられた被害者」ではなく「犠牲者になることによって加害者になったという構造」を見据える必要の指摘(『日本の近代化と戦争責任 わだつみ学徒兵と大学の戦争責任を問う』明石書店、1997年、35-37頁)などがあるが、上原良司に対しては、手塚英男「70年目のきけわだつみのこえ：「自由主義者」上原良司の特攻死をめぐって」(『季論21』編集委員会『季論21』32号、2016年4月)188-201頁が、良司自身の言説が抱える多くの矛盾を指摘して、良司への過剰な評価を批判し、その相対化に向けた問題提起を試みている。
 7. この成果は、福沢研究センターより『長野県安曇野市上原家資料』として2019年より刊行予定。その概要は横山寛「上原良春・龍男・良司兄弟の資料と分析」(学徒出陣75年 シンポジウム・研究報告「慶應義塾と戦争」、2018年12月2日)において報告された。
 8. 保阪正康『「特攻」と日本人』(講談社、2005年)、131頁。
 9. 宮坂静生「戦没学徒 上原良司の手記」(『信濃毎日新聞』、1982年8月13-14日)は、遺書以外の良司の手記に着目した早い例である。これに中島博昭による『あゝ祖国よ恋人よ』の編集が続くこととなる。両者とも良司の祖父良三郎(三川)が正岡子規門下の俳人として知られることが与えた影響の可能性についても指摘している。
 10. 上原家資料仮目録番号R-1(上原幸一氏蔵)。「僕」の一字のみは、「自分」という活字の横に手書きで記入されている。また若干の書き間違いによる抹消などもみられる。『あゝ祖国よ恋人よ』口絵、『新版きけわだつみのこえ』(岩波書店、1995年)、378頁にも掲載されているが、表記に原文との差異がある。この暗号メッセージは、裏表紙見返しの遺書末尾にある「最後に彼女のために祈らせていただきます」という言葉を受けていると考えられる。すなわち、最後の言葉を伝えたい相手には、名前を挙げて言葉を贈っているにも関わらず、「彼女」だけが無記名で「祈らせていただきます」というだけであり、贈りたい言葉は、本文中の暗号ということになる。遺書を書いた時点で石川治子はまだ生存しており、結婚式は挙げていないが婚約したことは良司も知っていた。従って暗号も彼女を「こんやくのひとであった」と書いているのみで、結婚や死への言及がない。このように見れば、暗号が第1の遺書と同じ日の夜(少なくとも入営前)に書かれたことは明らかである。
 11. 『長野県安曇野市上原家資料Ⅰ』(慶應義塾福沢研究センター、2019年発行予定)、上原昭純・上原登志江聞き取り参照。
 12. この葉書は展示会出品時に主催者が紛失し、コピーしか伝わらない。
 13. 亀岡敦子「上原良司の新資料に見る虚像と実像」(学徒出陣75年 シンポジウム・研究報告「慶應義塾と戦争」、2018年12月2日報告)において、この3者の関係について報告された。この内容は、『長野県安曇野市上原家資料Ⅱ』(慶應義塾福沢研究センター、2021年までに刊行予定)にて収録予定。
 14. 穂苅稔編『新版有明山に日かげさし』(上原良司の灯を守る会、2013年)、47頁。前掲『長野県安曇野市上原家資料Ⅰ』、上原昭純・上原登志江聞き取り。
 15. 高木俊朗『遺族』(出版協同社、1957年)、89頁。なお「遺族」は同じ日に出撃した鷺尾克巳を主人公としているが、鷺尾が自身のノートに残した記述が同書の口絵にある。これを見ると「第五十五振武隊」とあってから「官氏名」「本籍地」「現住所」「生年月日」「出身校」「所感」と項目別に横書きに記入されている。良司の「所感」は縦書きの原稿用紙であるが、書き出しの項目はほぼ一致する。良司の「所感」がどのような状況で書かれたかについては、なお検討の余地があるものと考えている。
 16. 上原良司のみならず上原家の人々は非常に筆まめで書簡や手稿が無数に残されているが、そのために書き慣れた表記が本人に確立しており、遺書でも普段通りに記されている。遺書との関連で特徴的な表記を記せば下記の通りである。
 - ・平仮名の「は」→「ハ」と表記(カタカナではなく平仮名の変体仮名と理解すべきもの)
 - ・平仮名「な」→「ふ」に近い書体(変体仮名)で表記
 - ・平仮名「を」→「え」「之」に似た書体になることあり
 - ・平仮名「む」→「玉」に似た特徴的な字形を持つ
 - ・漢字「明」「国」→「月」、国構えの崩しが大きい
 - ・漢字「見」→平仮名「え」「ん」に近い
 17. 上原家資料仮目録番号X-24(上原幸一氏蔵)。
 18. 上原家資料仮目録番号X-23(上原幸一氏蔵)。
 19. 中島博昭編『新版 あゝ祖国よ恋人よ』(信濃毎日新聞社、2005年)、228頁。
 20. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』、255-256頁。
 21. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』、238頁。入営後、しかも石川治子に触れていないからその訃報を聞く前、という理解であろう。
 22. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』、239頁。
 23. 例えば、前掲岡田『日本戦没学生思想〈わだつみのこえ〉を聴く』、183頁。
 24. 良司の帰郷は、昭和19年1月の龍男の遺骨の帰郷の際と、昭和20年4月の最後の帰郷が明確である。それ以外では、昭和19年7月末に館林から知覧へと移動する途中で1日の帰郷が許されたと考えられている。前

掲亀岡「特攻隊員・上原良司が問いかけるもの」, 36 頁。

25. 長野県立歴史館『長野県民の 1945 疎開・動員体験と上原良司 (図録)』(2015 年), 48 頁は昭和 20 年 4 月の帰郷に際して遺書を書いたという立場を取っている。
26. 中島は「もっともすっきりした残し方をしたのが、良司にとって一番観てほしいと願った三通目であった」(前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 228 頁)と書くように、3 通目が書かれることが当初から良司に想定されていたかのように解釈している。
27. 前掲保阪『「きけわだつみのこえ」の戦後史』, 12-13 頁, 35-36 頁。なお、前掲の『週刊朝日』(1949 年 1 月 23 日号)に掲載された「所感」では、やはり冒頭の本籍・出身校などの部分と「栄光ある…痛感致して居ります」までが削除されているほかは、文中で数カ所の異同があるもののほぼ原文通りである。
28. 前掲保阪『「きけわだつみのこえ」の戦後史』, 36 頁。
29. なお、「くちなしの花」と題された遺稿の原本は慶應義塾福沢研究センターが所蔵しているが、『きけわだつみのこえ』ほか従来の刊行物では八重子への呼びかけが「君」に変えられているが、実際は「御前」である。
30. 当初は遺族が知人に配布した私家版であったが、その後旺文社 (1974 年), 光人社 (1995 年) より刊行された。また八重子が後年、宅島との思い出を中心とした手記を出版した (赤沢八重子『私記くちなしの花』, 光人社, 1998 年) のは珍しいケースであろう。さらに渡哲也や美空ひばりの楽曲にも影響を与えている。
31. 「修養反省録」, 昭和 19 年 6 月 5 日付。前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 168 頁。
32. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 222 頁。
33. 上原家資料仮目録番号 X-25 (上原幸一氏蔵)。前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 188 頁に「最後のメモ・ノート」として収録されているが表記等に変更されており、「野口大尉」は「N 大尉」となっている。前掲「愛情は炎と燃えて!! 戦歿学生の愛人への遺書」で、すでに部分的にこの記述が紹介されている。
34. 石川凱一氏によるメモ (2016 年 5 月 16 日)。
35. 石川凱一氏聞き取り (2016 年 5 月 16 日)。『長野県安曇野市上原家資料Ⅱ』(慶應義塾福沢研究センター, 2021 年までに刊行予定)に収録予定。
36. 『新版 あゝ祖国よ恋人よ』の表記は「みえ子」となっているが、本人の表記は「みゑ子」。特操二期生会『学鷺の記録 積乱雲』, 1982 年, 17 頁ほか。
37. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 274 頁。
38. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 22 頁 (凡例)。
39. 江口瑠璃子との関係については以下で触れる資料類には登場しない。このことについては前掲の亀岡敦子「上原良司の新資料に見る虚像と実像」(学徒出陣 75 年 シンポジウム・研究報告「慶應義塾と戦争」, 2018 年 12 月 2 日報告)において、詳しく報告され、『長野県安曇野市上原家資料Ⅱ』(慶應義塾福沢研究センター, 2021 年までに刊行予定)に収録予定。
40. 上原家資料仮目録番号 R-73 (上原幸一氏蔵)。前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 30 頁以下。
41. 上原家資料仮目録番号 R-2 (上原幸一氏蔵)。前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 63 頁。
42. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 243 頁。
43. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 257 頁。
44. 「犀川を遡る 川筋郷土ものがたり 8 平和のシンボル 乳房橋」『市民タイムス』(2008 年 5 月 4 日)。
45. 「あの戦争を、知る。」2011 年 08 月 15 日 23 時 24 分～24 時 28 分放映。
46. 2017 年 8 月 13 日 19 時 54 分～21 時 54 分放映。
47. 小畑弓子氏聞き取り (2016 年 7 月 30 日)。『長野県安曇野市上原家資料Ⅰ』(慶應義塾福沢研究センター, 2019 年発行予定)に収録予定。
48. 前掲『新版 あゝ祖国よ恋人よ』, 258 頁。
49. 良司の遺書について「奇跡的に検閲を免れた」と言われることが多いが、これは不正確と思われる。第 2 の遺書は自宅に残され、第 3 の遺書は軍人ではない個人に託された。主として内地にいた者に限られるが、もし何らかの意思表示をしようとしたならば、外出許可時に、基地外のポストに投函することや、民間人に託す機会は皆無ではなかった。実際にそのようにして残された書簡は多数存在している。

都倉武之 (慶應義塾福沢研究センター准教授)

